

# 伊吹山と「採葉使」① —享保6年の伊吹山調査—

皆さんは、「採葉使」という言葉をご存知でしょうか。採葉使は、字にあるように「葉」を採集する人たちのことですが、ここでいう「葉」は葉そのものではなく、葉の原料となる「葉草」を指します。今回は、伊吹山を訪れた採葉使について見ていきたいと思ひます。

まず採葉使について説明します。採葉使は、江戸幕府8代将軍・徳川吉宗が享保の改革のひとつとして、葉の栽培・研究機関である「葉草園」の充実を図ることを目的として、諸国の葉草を調査・採集するために設けられた役職です。

さて、伊吹山は標高1377mと高山ではないものの、山頂には高山植物が咲きほころぶ滋賀県最高峰の山です。これらの高山植物の中には葉効(葉の効能)を持つ葉草も多くあり、百人一首では藤原実方が「えやはいぶきのさしもぐさ」と伊吹山のもぐさについて詠っているように、伊吹山の葉草については古くから知られていました。幕府の採葉使も当然ながら伊吹山の葉草調査に乗り出します。

採葉使による伊吹山の調査は、江戸時代中期の享保6年(1721年)と寛保3年(1743年)の2回行わ

れています。

まず、享保6年の調査について見ていきましょう。享保6年の調査は柏原宿の記録「萬留帳」(『柏原宿萬留帳調査報告書』参照)に記録されています。この時の調査は、本草学者(葉学者)である丹羽正伯と植村政勝が派遣されました。「萬留帳」には、丹羽・植村のたどった調査経路が記録されています。

丹羽ら採葉使一行は、享保6年5月に京都・比叡山を出発し、12日に今津(高島市)、翌13日に竹生島を経て同夜に彦根に宿泊します。この時、今津では加賀藩から「二汁七菜」、彦根では彦根藩から「二汁五菜」の饗応を受けています。

さらに翌14日に、本来は上野村(米原市上野)で宿泊予定でしたが、急遽予定を変更し太平寺村に宿泊します。上野村・太平寺村のどちらも伊吹山の登山口の村です。

採葉使一行は、15日に「伊吹山御見分」を実施し、その晩には「濃州中山村」で宿泊します。中山村は現在の揖斐川町の春日地域に当たり、伊吹山の東麓に位置します。ここから、伊吹山を横断する形で葉草調査を実施したことが伺えます。(小野 航)



佐加太とは、「和名抄」東急本の坂田郡の訓を引用しました

第 49 号

2020年3月27日

滋賀県米原市教育委員会

## 長門寺遺跡発掘調査速報

長門寺遺跡は、米原市顔戸に所在し、琵琶湖の北東部を南北に伸びる横山丘陵の南西裾部に位置しています。弥生時代の方形周溝墓、古墳時代の集落跡、中世の土坑など様々な年代の遺構からなる複合遺跡です。

長門寺遺跡は周辺に所在している、高溝遺跡・顔戸遺跡・正光寺遺跡とともに「顔戸遺跡群」を形成しており、長門寺遺跡はこの遺跡群の南端に位置しています。

この長門寺遺跡の中央部には、古くから小字に「長門寺」という地名が存在していることから、寺院に関連した遺跡であると考えられていましたが、平成2年度の第1次調査では、中世の井戸跡とみられる土坑とともに、弥生時代後期の方形周溝墓が3基見つかりました。この3基の方形周溝墓のうち、SX9001の周溝部分から、この地域の特徴である受口状口縁をもつ「手あぶり型土器」や甕などが出土しています。

また、平成7年度に行われた第2次調査では、方形周溝墓は見つからなかったものの、古墳時代の溝が見つかりました。この溝は出土した須恵器などから6世紀後半ごろのものとして推測されています。また、同年代の資料が、長門寺遺跡の北東100mの場所に位置する亀塚遺跡からも見つかりました。

## 第3次調査の結果

今年度、県道伊部近江線と県道東上坂近江線を南北でつなぐ市道顔戸・八田羽織線の新設工事に伴い、2019年7月8日から9月26日にかけて第3次調査を実施しました。今回の調査で、弥生時代の方形周溝墓2基、古墳時代の土坑1基などが見つかりました。

方形周溝墓からは年代を特定できる遺物は出土しませんでした。平成2年度の調査で見つかった方形周溝墓と同一の主軸方位を持つことから、同時代および同一のグループであろうと考えられます。

古墳時代の土坑からは甕や壺、甗などの土師器の他に、坏や高坏、器台などの須恵器が出土しました。これらの遺物は5世紀末から6世紀初頭の頃のものと考えられます。土師器は在地で焼かれたものが多数を占めますが、中には東海地方から運ばれてきたと考えられる甕も出土しています。また、上記の遺構の他に、調査区の北端で沼の堆積を確認しました。平成元年(1989年)に長門寺遺跡の南側で、広範囲にわたる試掘調査が実施され、その調査で同遺跡の南側に沼沢地がひろがっていたことが確認されています。この試掘調査の結果を踏まえて考察すると、長門寺遺跡の南北には沼沢地が広がっていたとみられ、北側と南側を沼沢地で囲まれた横山丘陵からのびる舌状の台地上に方形周溝墓が営まれたのではないかと推測されます。(石田雄士)

## 情報BOX

◆米原市教育委員会では下記の報告書を刊行しました。

『柏原宿萬留帳調査報告書3』

近江国中山道柏原宿三〇〇年の蓄積

※第3巻は、1779年から1797年までの柏原宿の出来事を収録しています。

◆米原市教育委員会では下記の冊子を刊行しました。

『米原の弥生 —米作りが始まったころ—』

※埋蔵文化財公開活用事業パンフレット第15集です。

◆米原市教育委員会では下記のトレッキングマップを作成しました。

「八講師城」「長比城・須川山砦」

◆米原市伊吹山文化資料館では下記の報告書を刊行しました。

『曲谷の石工道具』(滋賀県立大学と協働)

『伊吹山文化資料館年報21』

—平成30年度の活動—

◆淡海文化財論叢刊行会から、『淡海文化財論叢第十一輯』が刊行されました。

※米原市関係者の論考として「史跡清瀧寺京極家墓所における多度津藩京極家の宝篋印塔について」(石田雄士)、「伊吹山と幕府採葉使」(小野 航)、「米原市曲谷花崗岩製の石籠」(高橋順之)があります。

◎問合せは、米原市教育委員会まで。

## ◆◆編集後記◆◆

平成7年3月31日に創刊された『佐加太』■当時は滋賀県坂田郡4町の文化財担当による坂田郡文化財ニュースでした■開発に追われた発掘調査も諸先輩方のご努力でレールが引かれ、発掘に対する理解や出土品への関心が高まるなか■年2回の発行を謳い、各町の埋蔵文化財に関する話題を広く全国に発信してきました■平成17年5月発行の22号では合併により新しい「米原市」が誕生したことを紹介しています■幸い合併前の「坂田郡」と「米原市」はその範囲が同じなので『佐加太』もスムーズに米原市文化財ニュースに移行しました■新しいまちを知っていたらこうと、全国に向けて埋蔵文化財以外の話題も発信しました■嗚呼…。それなのに…。なんということでしょう！■昨年度も今年度も、編集子の怠慢で1回しか刊行しませんでした■微々たる印刷費をカットされたことへの脱力感。言い訳です！■前回の48号は自力でレイアウトして発行しているのですから…。■心を入れ替え、年度末ではありますが、初心にかえって埋蔵中心の49号をお届けします(シャンギリっ子)

米原市文化財ニュース

## 佐加太 第49号

発行 令和2年3月27日  
編集 米原市教育委員会  
〒521-0292 滋賀県米原市長岡1206  
米原市教育部 歴史文化財保護課  
TEL0749 (55) 4552



▲長門寺遺跡第3次調査全景



▲方形周溝墓完掘状況

## 最近のイチオシ！ 八講師城

北近江の戦国時代後期後半（1550年頃）まで、守護・戦国大名として政権を維持したのは京極氏です。戦国京極家の最後の当主は京極高広です。大永3年（1523）、上平寺城を国人一揆で追われた京極高澄の長男で、『郷野文書』に、「河内の御屋形様」と称されています。弟高吉との家督争いを天文11年（1542）に和睦した高広は、台頭する浅井久政を攻めて臣従させ、天文19年から22年まで南近江の六角氏との抗争を続けます。このとき、高広軍の南下はつねに霊仙山中から、芹川に沿って平野部を攻める山越えルートでおこなっています。高広は、坂田郡の山間部、霊仙山中で勢力を維持していたようです。しかし、永禄3年（1560）、浅井長政が六角氏と断交した際に、六角氏とともに湖北へ侵攻しましたが、失敗し、北近江を追われます。

### 八講師城（米原市河内）

河内には、京極氏の支城があり「小字猪の鼻」に所在し、…京極氏の隠れ城」といわれます。さらに、集落から、林道をさらに山中に入ったところに八講師城があり、江戸時代の地誌には、多賀豊後守高忠や京極九郎高数など、北近江の守護京極氏や有力家臣の伝承があります。城跡の中心部は、方形を意識した三段の曲輪で構成されており、最も上位の西の曲輪が主郭です。東曲輪には、石垣による虎口がのこり、戦国末期に改修されたことがうかがえます。中心部から派生する尾根は5本ありますが、八講師城のすごいところは、この尾根すべてに曲輪を配置していることです。西尾根や南尾根では広く長大な曲輪が続き、かなりの土木量が投入されて、大軍勢が駐屯したようです。このことから、八講師城は、中世京極氏最後の当主京極高広の拠点だと考えられます。

### 男鬼入谷城（彦根市男鬼・多賀町入谷）

米原市の南に位置する彦根市鳥居本地域（旧坂田郡）は、霊仙山地が深く、多賀町域とまたがって谷筋に小集落がわずかに点在しているにすぎません。男鬼入谷城は、見渡す限り山しか見えない標高685mの尾根頂部にあり、主要街道の北国道や東山道とは、西に約5kmも離れた、まさに山中に孤立した立地です。

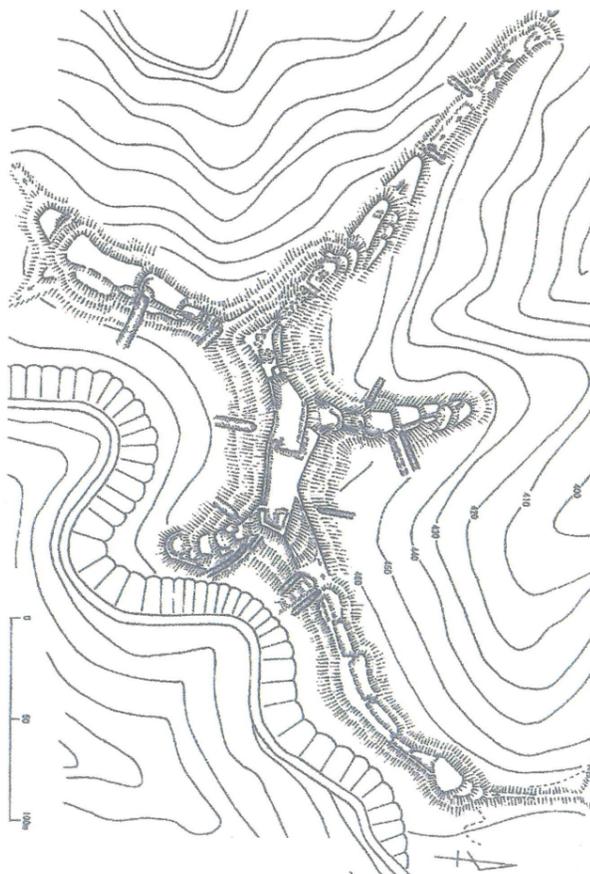
城は尾根上のふたつの頂部と尾根筋を利用して築かれています。北側には三重堀切や、これに面して内側に石積を持つ土塁を設け、東側尾根には、食い

違いの堅堀を伴った櫓台や二段にわたる畝状堅堀群が構築されています。ほかにも、南に配した巨大な二重堀切や、石塁で築かれたトーチカ（特火点）的遺構とその直下の垂直の切岸とさらに二重堀切。

これらの多くは、岩盤を削って、石塁とあわせて高い土木能力がうかがえ、戦国時代後半の山城の到達点と評価されています。戦国後半に、霊仙山間部を領域とした権力者は京極高広です。八講師城を中世京極氏最後の本拠とするなら、男鬼入谷城は、他の勢力の軍事力が及ばない山間地に、軍事目的のみで築城された出撃拠点ととらえることができます。（高橋順之）



▲八講師城の切岸（人工の急斜面）



▲八講師城跡概要図（中井均氏作図）

## 山津照神社古墳出土の獣文鏡

### 歴史学習に活かします

米原市教育委員会では、山津照神社古墳（能登瀬/滋賀県指定史跡）から出土した獣文鏡（県指定考古資料）の「複元品」を作成しました。米原市を代表する遺跡である「息長古墳群」を理解するために、博物館施設での展示公開、学校授業や歴史体験プログラムでの利活用を図ります。また、鑄造体験ができるミニチュアの「鑄型」も作りしました。さらに、食品用シリコンで「型」を作成し、鏡のチョコレート作りなどの体験をおこないました。

ここでは、復元品製作にいたる工程を紹介します（記録：滋賀県文化財保護協会 鈴木康二氏）。

1. 錫箔を背面側に貼る。（※鈕には詰め物をする）
2. 鏡面側は、表面のサビ&付着物（布か）を考慮して、錫箔貼りを縁取りだけで済ませます。
3. もう一度背面側に、2度目の錫箔を貼り、二重にする。この時、錫箔の表面の微細な孔を「目視できるものは全て潰す」ことに留意する。（※目視できないサイズは、樹脂の染込みは起きないため、無視できるとのこと）
4. 鏡面側には、サランラップを貼り、テープと錫箔で、縁を養生する。
5. 鏡面側の縁に、液状の樹脂を塗り、その上にさらにサイコロ状の樹脂を数カ所に貼り付ける。
6. 背面側に液状の樹脂を塗布、2時間（※この時間は気温・湿度等によって多少の前後はある。）ほど凝固するのを待つ。
7. 凝固を確認し、その上にガーゼを重ね、さらに液状樹脂を塗布。
8. 樹脂の凝固を確認したのち、表面に錫箔を貼る。（※この錫箔はこの後に塗布・成形する石膏を、硬化後に外し易くするために貼付。）
9. 石膏を塗布、台状に成形する。
10. 石膏硬化後、石膏台を取り外す。（※石膏の硬化は、表面温度で確認。温度が上昇する間は水分の放出が進行中。温度が一定・低下し始めた時点で、硬化作用は収束）
11. 樹脂型を鏡から慎重に取り外し樹脂型の完成。（※資料に付着した錫箔を、丁寧かつ慎重に除去後、学芸員（所有者）等による鏡の状態の確認）
12. 11で作成した樹脂型からエポキシ樹脂製複製品を作成。
13. エポキシ樹脂製の複製品の細部を、実物と対比させながら、表面を削り修正する（※具体的には、鏡の部分を削り紋様等を明確にする）
14. 原型の最終確認および色調の検討（今回は、銅70%、錫25%、鉛5%）
15. 鑄型作成、鑄込み作業
16. 鏡背面および鏡面の研磨、仕上げ

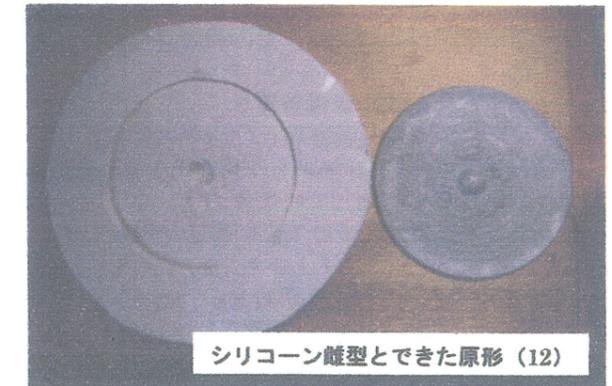
（高橋順之）



原資料



鏡背面箔養生（3）



シリコン雌型とできた原形（12）



完成品